宮城県漁業士会報　第8号

発行：平成17年3月
宮城県漁業士会
仙台市青葉区本町3丁目8-1
（宮城県産業経済部産業人材育成課内）
TEL　022－211－2764
FAX　022－211－2769

鳴瀬川河口（野蒜）から仙台湾を望む風景（写真提供：熱海健悦指導漁業士）

ごあいさつ

宮城県漁業士会会長　阿部　正春

輝かしい二〇〇五年を迎えられ会員の皆様にはご健勝のこととお喜び申し上げます。漁業士会の活動におきましても皆様には絶大な御協力をいただき心より感謝申し上げます。

我々漁業者は日々多大な努力をして安全、安心な水産物を国民に提供している訳でございますが、輸入水産物の増大による魚価の低迷、漁場環境の悪化、漁業後継者の減少、漁業者の高齢化などの問題が山積しており、このような中で我々は希望に満ちた漁業と活力ある漁村地域作りの中核となり宮城の水産の確立に向け総力を結集し、取り組んでいく必要があると思います。一般の方々にも海を、そして我々の仕事のことを知ってもらわなければなりません。このたび消費者等との交流促進を図るため漁業士交流促進事業と称し、幾らかの支援金を交付することになりました。多くの方々にご活用していただければと思っております。

また、漁協合併や市町村合併を目前にして我々漁業士も大きく関わっていかなければなりません。合併をよく理解して活力ある漁村、地域づくりに寄与していきたいと思います。

最後になりますが、会員の皆様には宮城県漁業士であるという誇りをもってますますご活躍なされますようお願いしますとともに、会報発行にあたり皆様の御協力に対し、一言御礼申し上げて御挨拶といたします。

新漁業士のご紹介

宮城県漁業士会事務局

平成十六年六月一日に仙台市内の「ハーネル仙台」で宮城県漁業士認定証交付式が行われ、新たに十四人の青年漁業士と十六人の指導漁業士が認定されました。認定式では、浅野知事から一人一人に認定証と徽章が手渡しされました。新漁業士を代表して須田恵美さんが挨拶し、地域の活性化、漁業後継者の育成に全力を尽くして取り組む事など、漁業士としての決意を語りました。

○青年漁業士認定者（十四人）

小野寺芳浩（唐桑町漁協）
小山　知利（唐桑町漁協）
梶原　浩之（唐桑町漁協）
畠山　壮彦（唐桑町漁協）
菊田　俊秀（気仙沼地区漁協）
小松　俊浩（気仙沼地区漁協）
村上　広志（気仙沼地区漁協）
西條　覚（北上町十三浜漁協）
阿部　源史（矢本町漁協）
阿部　雄美（矢本町漁協）
津田　正次（矢本町漁協）
野村　秀友（矢本町漁協）
上崎　直創（宮戸西部漁協）
武山　智紀（塩釜市浦戸漁協）

○指導漁業士認定者（十六人）

菅原　富男（大谷本吉漁協）
堀内　仁（大谷本吉漁協）
阿部　長喜（歌津町漁協）
阿部　洋（歌津町漁協）
三浦　富一（歌津町漁協）
小野寺敏一（志津川町漁協）
菅原　長弥（志津川町漁協）
高橋　源一（志津川町漁協）
三浦さき子（志津川町漁協）
大江　清明（女川町漁協）
鈴木　公義（女川町漁協）
鈴木　強（女川町漁協）
須田　恵美（石巻地区漁協）
豊嶋恵美子（石巻地区漁協）
及川　輝明（矢本町漁協）
三浦　一郎（矢本町漁協）

知事から認定証を受け取る指導漁業士

平成十六年度 一次産業交流会について

宮城県漁業士会事務局

農林漁業の担い手が一堂に会した一次産業交流会が平成十六年七月二十七日から二十八日まで山間部の蔵王町等で開催されました。今回は「新たなビジネスチャンスを探る」をテーマに、生産ばかりでなく、付加価値を付けた販売戦略について農業と林業分野の実践事例を視察しました。活動報告では、阿部正春会長が「ノリの流通について」と題して、海外からのノリの輸入状況や消費者との交流の大切さ等を報告しました。

なお、視察先の概要は次ぎのとおりです。

○(有)サンファーム韮神　村田町

平成七年に設立され、本県初の大規模な菌床シイタケ生産施設を導入しました。この施設の導入により省力化が図られ、高齢者や女性の方々の就労の場が確保されるとともに、周年生産が可能になりました。平成十五年度の生産量は約二十四トンとなっています。

○(有)佐豊牧場　蔵王町

代表取締役の佐藤正さんは、指導農業士会会長でもあり、地域酪農家のリーダーとして活躍されています。乳牛・肉牛の一貫経営を実践しており、平成八年に法人化しました。生乳は付加価値を付けるため、近隣酪農家と連携してヨーグルトやチーズドリンクなどに加工し販売しています。また、平成十五年には畜産環境問題に対応するため、大規模な堆肥舎を導入しています。

○不忘果樹園　蔵王町

代表の山家一彦さんは、指導農業士でもあり、地域果樹農家のリーダーとして活躍されています。ウメ、日本ナシ、西洋ナシ、ブルーベリー等の複合経営に取り組んでいます。直接販売に重点を置き、「不忘果樹園」のパッケージで販売している他、ギフト会社とのタイアップも行っています。特に、消費者の安全・安心志向に対応するため、減農薬栽培を実践し、積極的にPRしています。

○(株)ヒルズ　大河原町

肉豚出荷一万四千頭を誇る県内最大規模の養豚経営を行い、昨年、日本農業大賞を受賞しています。専務の佐藤富男さんは、指導農業士としても活躍されています。今後も六千頭規模の農場を建設する等、規模拡大により十億円の売上げを目指しています。また、農畜産物直売所やふれあい農園を運営し、利益追求一辺倒ではなく、地域住民への還元活動にも積極的に取り組んでいます。

不忘果樹園での交流会

平成十六年度 東北・北海道ブロック漁業士研修会について

宮城県漁業士会事務局

平成十六年七月三日から四日まで茨城県大洗町で東北・北海道ブロック漁業士研修会が開催され、来賓の水産庁普及指導官高瀬さんをはじめ、総勢百十六人が参加しました。

講演は、(財)魚価安定基金の佃さんと全国漁業共済組合連合会の小無田さんからいただきました。

今回は「漁協系統の販売事業の再構築について」と題して行われた佃さんの講演の概要をお知らせします。

（講演概要）

この二十年間の国内水産物の仕向け状況を見ると、昭和六十年から平成十年の間で、国産の生鮮・冷凍向けが減少し、輸入水産物が増加した。平成十二年以降は、国産の加工品が減少し、輸入水産加工品が増加している。海外の加工度の高い水産物が国内に流入している状況にある。輸入加工品の増加は、国内の水産加工品だけでなく、産地市場の魚価の低迷にも関係している。というのは水産加工業者が仕入れに消極的になっており、これが産地市場にまで、少なからぬ影響を及ぼしているのである。

魚価の安定のためには、既存の市場に依存したままでは限界がある。長年、市場の合理化、改善に力が注がれてきたが、結果として魚価は、低迷したままである。今まで中央市場の動向を受けて、生産出荷してきたわけであるが、量販店等の最も消費者に近い流通業者の意見も参考にすべき時期にきている。量販店で魚が売れるのは、一週間のうち土曜日と日曜日だけである。あとは、魚に限らず、売れていないのである。しかし、土日は、市場や漁が休みで、魚がないという状況にある。量販店では、土日に新鮮な魚介類を喉から手が出るほど欲しがっていることを知って欲しい。特に魚介類は、料理に手間がかかる。一般の家庭でゆっくりと買い物や料理を楽しめるのは、週末だけなのである。こうした消費の動向に合わせた生産出荷に取り組んでみてはいかがだろうか。また、量販店で顕著なのは、惣菜コーナーが拡大していることである。単身者や共働き夫婦が増加している中、加工品は消費者にとって魅力的な商品である。今、外国企業は、水産物の惣菜に目をつけている。

こうした状況にある中、魚価の安定を図るには、生産だけでなく、生産者による販売までの取り組みが必要となってくる。例えば、輸入品や国内の水産物については、その多くが消費者に届くまで、少なくともツーフローズン（二回冷凍）以上の過程を経ている。鮮度は、人の手に触れれば触れるほど落ちる。鮮度は、生産者が持つ最大の武器である。だから、鮮度を切り札にして、生産者が直接、量販店に提案するという方法もある。

しかし、生産者は、時間的に余裕がなく、販売まで手が回らないのが実情である。そこで、漁協系統の組織力を利用してはいかがだろうか。漁協系統組織は、今こそその存在価値を発揮する時であると思う。そのためには、自らの経済基盤を作り出すことが必要である。漁業協同組合連合会は、四十一道府県にあり、これをネットワーク化し、加工・販売機能を共有化すれば、国内有数の食品製造・販売業者に変身できる。鮮度の良い大量の商品を動かせるのだから、量販店等に対して、逆に優位な立場が取れると考えられる。

今日の話は、良くも悪くも提案に過ぎない。浜に帰ったら、どうやって魚価を向上させるか、仲間の方々と話し合ってほしい。

東北・北海道ブロック漁業士研修会

女性漁業士交流研修会について

宮城県漁業士会事務局

平成十六年度女性漁業士交流研修会が八月十八日から十九日まで、青森県野辺地町で開催され、青森県、岩手県、宮城県の女性漁業士十五人が参加しました。

交流研修会では、漁家経営や漁場保全の取り組みについて活発な意見交換が行なわれました。

ここで、参加した方々の感想を紹介します。

○指導漁業士　尾形静子さん

たくさん意見があり、時間が少なすぎる位でした。三県の中では、宮城の漁は豊かだと思いました。他県の漁の厳しさを聞き、海の豊かさに甘んじず、獲る漁から海を守り育てる漁に変えなければと感じました。次回の宮城県開催の研修会でも、良い話ができればと思います。

○指導漁業士　江刺みゆきさん

岩手県の女性指導漁業士の方二人が、家族経営協定を結んでしばらくなることを知りました。男女がお互いにパートナーして活動することで、地域と家庭は明るくなります。漁業士活動は、漁協女性部と違って男性と一緒に活動できるので、これから「男女が共に」という意識を地域に広めて行く必要があると思いました。

○指導漁業士　坂下清子さん

どこの浜も皆大変だということが

分かりました。そんな中、仕事をし、家事もこなし、その上地域のリーダーとして活動している人達はイキイキしていました。青森県では地域ぐるみで子供達と一緒に廃油をリサイクルし、石けんづくり等を行っており、大変感心しました。今後、地域の人達と共に地産地消や環境保全の取り組みの輪を拡げていきたいと思います。

○指導漁業士　畠山悦子さん

青森県と岩手県の漁業士会では、女性を役員に登用し、会の運営に女性の意見を取り入れているということでした。漁村地域の男女共同参画は、重要な課題であり、男性漁業士と女性漁業士の意見交換の場が必要と思いました。また、漁協女性部と漁業士会が連動して課題解決に向けて取り組んでいければと思います。

平成十七年度は宮城県で開催されますので、女性漁業士の皆さんは、是非御参加願います。

活発に行なわれた意見交換会

支部だより

▼南部支部

新青年漁業士の紹介

平成十六年六月に新たに青年漁業士として認定された二名の方を紹介します。

塩釜市浦戸漁協
武山智紀さん

平成十六年度に青年漁業士として認定を受けた塩釜市浦戸漁協所属の武山です。私は、宮城水産高校を卒業後、遠洋鮪延縄、海外巻網、工事作業船等で、航海士、船長等の船員生活を経て、家業の漁業、民宿業遊漁船業に就きました。

漁業に従事して約十年になりますが、現状の環境の中で如何に経営利益を上げられるか、試行錯誤を繰り返しながら、日々考えています。

デフレによる魚価低迷、燃料の高騰等漁業情勢は厳しいものがありますが、経費をかけず多角経営を営むために、漁獲した新鮮な魚介類は自ら営む民宿でお客様に低価格で提供し、良好な漁獲場所を把握することで遊漁船業へと活用しています。また、自ら営む経営の不足部分を補う為、現在は自営業の傍ら建設業界と提携し警戒船や交通船業務を請け負うなど、忙しい日々を送っています。これからも、自らの経営を如何に高めるかを基本とし、漁業経営のみにこだわらず、異業種間と交流を深めながら、海は作業場であるという観点から、仕事に取り組んでいきたいと思います。

宮戸西部漁協
上崎直創さん

平成十六年度に青年漁業士として認定を受けた宮戸西部漁協所属の上崎です。現在は、鳴瀬町宮戸月浜地区の基幹産業である海苔養殖業を主とし、夏場にはアワビ、ウニ、アサリ等の採介藻漁業を営んでいます。

私が、営んでいるノリ養殖は、「輸入のり」の問題という厳しい環境に直面しており、今後、安定した経営を目指すためには、地域の漁業者が互いに協力し、輸入製品に負けない海苔づりや、経営基盤の強化を進めることが不可欠だと考えています。

このため、平成十四年度に月浜地区で海苔養殖業を営むグループで宮城県で第一号となる「中核的漁業者協業体」の認定を受け、経営改善や「耐波性ノリ共同養殖施設」を設置して災害対策等に積極的に取り組んきました。

今後も、地域の協業化を進め、作業の効率化及び省力化を図りながら、災害対策を含めた経営基盤の安定化を目指し、他にまけない良質なのり作りに取り組んでいきたいと思います。

「干しがれい」グランプリを受賞

青年漁業士　菊池　幹彦
青年漁業士　菊池　勉
青年漁業士　後藤　修
（亘理町漁業協同組合）

昨年十二月二十一日に開催された「第六回伊達なわたり活き生き大賞」の審査会で、亘理町漁業協同組合漁業研究会の「干しがれい」がグランプリを受賞しました。

当漁協には、小型底びき網や刺網等で漁獲された新鮮な魚介類が水揚げされる反面、取引価格が安く、組合員からは魚価向上に向けた取組が必要との声が多くありました。このため、組合内部で魚価安対策を検討するとともに、指導機関である町に相談を行いました。

町との打ち合わせでは、①現在水揚げされている魚種の中で、水揚げ量が多く、いつでも手に入る魚種を選定すること　②これまで全量を買受人に販売していたものを一部加工に回すことで販売数量が減少し魚価アップに繋がりやすいもの　②昔からの食文化を継承し伝えられるもの

③特産品としての知名度を上げブランド品として定着するもの　④休漁時にも取り組め収入増加に繋がるもの等の条件が話し合われました。

これらの条件を踏まえ、調査すると共に高齢者に聞き取ったところ、亘理の食文化として、古くからマガレイを加工した干しがれいが絶品であった事が分かりました。

絶品、亘理の「干しガレイ」

取組は、組合との話もありましたが、組合員自ら取り組むことが必要との認識から、若手で組織する研究会が主体となり、組合・女性部の協力を得て活動を進めることとしました。

原料は、亘理町漁協市場に水揚げされたものを研究会が買取し、衛生管理や加工技術を勉強しながら試行錯誤を重ね、平成十六年二月から生産を開始し、四月には町の協力の下、イベントへの提供や亘理町国民保養センター等に数千枚を売る特産品となっています。購入者からは、地場に水揚げされた新鮮なマガレイを天日干ししており、美味しいと評判で、リピーターも増えています。

現在は、研究会員十二人で生産と販売を行っており、将来的には生産枚数を増加させ、漁業経営の強化に反映され、地域の牽引役となれるよう頑張っていきたいと思っています。

一度、食べてけさい。おらほの「干しがれい」

「干しガレイ」の販売

▼中部支部

視察研修「ツメタガイの駆除方法及びアサリの種苗生産技術」に参加して

青年漁業士　内海　広志
（石巻湾漁業協同組合）

県内のアサリ漁場では、アサリ移入に伴うサキグロツメタガイの侵入による食害の被害が報告され、その対応が求められ、同時に移入によらない地元のアサリを使用した種苗生産による資源造成が必要とされています。

私が所属する石巻湾漁協でも万石浦でサキグロツメタガイが見られ、アサリの食害が問題となっています。

県では普及事業の中でこの問題を今年度の主要な視察研修のテーマとして取り上げ、平成十六年七月七日から九日にかけて千葉県において視察研修が行われました。この視察研修には万石浦に漁場を持つ石巻湾漁協及び石巻地区漁協の青年部員五名、私を含めた漁業士二名、水産業改良普及員一名で計八名が参加しました。

初日は近縁種のツメタガイの食害が問題となり駆除を実施している東京湾に面した漁場を持つ木更津漁協を視察し、駆除作業内容についてのお話を伺い、実際に乗船し駆除作業の様子を視察しました。

ツメタガイの駆除は、底曳網で捕る方法で行われていました。底曳網は同組合の組合長が自作したもので幅三メートル程のコの字型ソリ付き漁具で網の幅の鎖を引きずりながらツメタガイやゴミを浮かして捕るものです。ツメタガイは夜間に海面表面に出てくるそうで、万石浦でも夜間の駆除を勧められました。特に月夜の晩が効果的だそうです。視察の時の駆除作業では十分程曳き、この時もツメタガイや砂茶碗と言われる卵塊が捕られました。卵塊には卵が数十万個あり、貝になる前の卵塊を駆除することが効果的な駆除作業だと強調されていました。

ツメタガイの卵塊

翌日には、アサリ種苗生産技術の視察のため、千葉県水産研究センター富津研修所を訪れ、研究員からスライドによって種苗生産技術について説明を受けた後、現場での説明を受けました。飼育水は病気を防ぐため紫外線殺菌した海水を使用しており、着底期には上から飼育水を掛け、下から流すダウンウエリングという方式で行われていました。生産